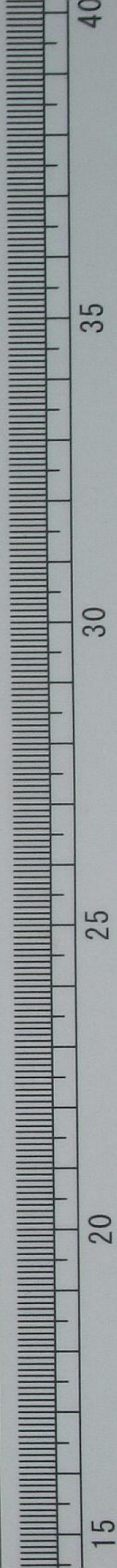


一新發明

林甕臣
速記大日本字

全

柳田文庫
文庫11
A153i



速記大日本字會之主無幹事林雍臣著


林雍臣
一新發明 速記大日本字

明治廿年八月
版權免許 速記大日本字の舎蔵版

速記大日本字

凡例



一本書速記大日本字の字體「△」「▽」「○」の○
の形も全く羅馬字と相同しく「△」「▽」の如き
も亦能く似かよひてゐる有れど固より口の開合と
舌唇の作用との貌を象どり表し且數字を指を屈
むる象どりたるより更に羅馬字は據れるより
非ざるごとく本文第一章に説示せるを觀てさとり
明らむべし蓋聞くと羅馬字も圓形○の畫内より方
形及十字形と交叉形とを畫きたる  を元畫と

○速記大日本字

凡例

○

速記大日本字

して文字をつくり出だせりしなり。と言ひ、或て、い
まゝかの□の如きて、牛の角の貌を象とれるよ
て、其の鳴く聲ウーと聞ゆるよ據りて、う音の記標
とせしなり」とされむ、かの○の如く、○の外邊○
よ基き、△の如く、其の内畫交叉形の片形よ據りしな
るべし。又數字の如きて、全く○畫中○よ基き
て、つくり出だせりし事、いちぢるし。

明治二十年一月八日

著者 識

柳田泉文庫

速記大日本字

目次



總論

第一章 字體の本因及成立

第二章 綴字法及變調符號

第三章 數字の成立及用法

第四章 書體及運筆法

第五章 漢語綴字法

第六章 指示辭結尾辭接續辭及感詞

第七章 速記大日本字と羅馬字との比較

○速記大日本字

○速記大日本字と羅馬字との比較

並に縦書きと横書きとの辨

第八章 加點畧字躰の綴字法及運筆法の

例文

第九章 畧點走筆躰の綴字法及運筆法の

例文

目次
第一章 日本字の概論
第二章 日本字の歴史
第三章 日本字の分類
第四章 日本字の綴字法
第五章 日本字の運筆法
第六章 日本字の書式
第七章 日本字の書風
第八章 加點畧字躰の綴字法及運筆法の例文
第九章 畧點走筆躰の綴字法及運筆法の例文



林 甕臣 新發明 速記大日本字



林 甕臣 著

總論

我々の國の文明、日よ其の歩を進め、外交の關係、月よ其の繁密に至る。今や、世界の情況、まさよ優勝劣敗、風潮の向ふ處、前途如何に成り行くべきや。眼を押拭ひて見よ。國の行方を思ふを有るべからざるを、實よ今日之急務とす。社會愈進化し、其の爲すべきの事業、益多きを加へざるべからざるを、自然の勢なり。されむ

○速記大日本字

○速記大日本字

其の處をべきの方法、從て時を減じ、勞を省き、其の敏速なるを要し、其の簡便なるを欲せらるゝ、文明諸國一般の通規たり。さるゝを文運開進の至要至切なる文章、多畫錯雜のみならず、數千百萬の多きを暗記せらるゝ非ざれむ、用を辨じ能わざらるゝ如き、不便不利なる漢字を用ふるを、經濟上の原理よさへ背き、前途國を維持をべき學生をして、貴重の歲月を無要に費やさしめん事、國の爲實に歎くも、尚餘り有り、と謂ふべし。我々大日本帝國の將來、漢字地を拂ふに非ざる限り、學術をもて、歐米諸國と對峙せん事、幾千年の後

を期せらるゝ、到底思ひも寄らぬ事なり。かの假名の會、羅馬字會の如きも、皆此の趣旨をもて起せらるゝ、率、壺臣らと感を同うせらるゝ者と雖ども、羅馬字の如きも、日本語に假用せんは綴字法、二字若く三字を横に雙べて、組合せざるを得ざる字體なれむ、一音の記標に充つるは、二字若く三字を要するをもて、一詞一句の上にも、書連ねたる字面自然長き、失し、讀むに不便を感じ、記を小手數を要し、又紙面を費やを事、甚多し。假名も、一音の記標、たゞ一字にて足るをもて、讀むに便を與へ、記を小手數を省き、紙面をも亦費やを事、

勘かれた、遠く羅馬字は優れらるゝ似たれども、運筆尚
横書きの至便なる小至ても、假名を、其の速力、却て羅
馬字は及び難き事、實驗上論を待たざして、人既に知
る所なり。蓋、假名も羅馬字も漢字も比較をるとき、こ
遙か優りたるべきも、共は一長一短有るを免かれ
ざして、究極完全の物と謂ふを得ざれど、之をもて、文
明學事上の至要至切なる利器として、今日も使用を
る小足るべき物とも、思われど、中よ就て從來日本字
として用ひ來たりつれど、假名の如き、片假名平假
名共よ元來支那の文字を畧製して假用せらるものよ

逆言アリ

過ぎざれど、之をもて羨諾りて、本邦固有の文字と稱
をるを得ず。嗚呼、他の器具事物を、兎も角も、學事
上至要至切なる文章と相須つべき貴重の文字まで
舶來品をもて、假用せん事、頗、獨立國の體面は關し、
皇統一系なる國體よも、耻づべきの至りなれど、和魂
憂國の士よして、誰う、之を遺憾とせざる者有るべき。
余本邦固有の文字無きを慨む、年久しきよ依り、多年
非常の苦慮意匠よ聊、思得たる處有りしを、數回の改
良を經、逐次よ訂正を加へ、遂よ今年一月本邦五十音
の記標及、數量の記號として、粲然觀るべく、實用よ足

○速記大日本字

○三 速記大日本字

るべき横書き至便の新字を發明せし事を得たり。抑
其の之を發明せし原由たるや、七八年來五十音の發
音法を正し定めんとせらるゝ從事し、嘗て口の開合舌唇
の作用を研究せらるゝ胚胎せしものよて、偶然一朝の
造爲し出でしものよ非む。悉皆我々大日本帝國人の
聲音發象の原理は基き、口の開合と息氣運營と相須
つ舌唇の作用とよ依りて、象とれるなり。又數字の如
きも、左手の指を拇指より順に折屈むる貌は基き、其
は實理の自然し出でたる字體なれを、之をもち、本邦
五十音の記標及數量の記號として、日用に用ひんよ

道理上として、動かをべからざるを論なく、之を便利
上より論究せらるも、字畫單簡として、實地に適切なもの
ならぬ、運筆速力の捷敏なる、綴りなせる字面の冗長
ならぬ、曾他の字體は比類を見ざる處の至便至利の
速記字と謂はんも、蓋敢過言よと、非ざるべし。是即自
をしがまゝ、きを打忘れ、此の文字を稱へて、速記大日
本字と名くる所以なり。光陰を惜しむ、實學を望み、前
途爲を有るべき志を抱ける學生を、必此の速記大日
本字を學びて、實地に用ひ、多畫錯雜なる漢字字形の
暗記と習字の練熟とよ貴重の歲月を無要に費やを

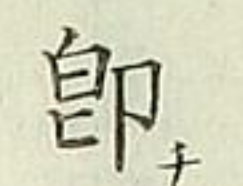



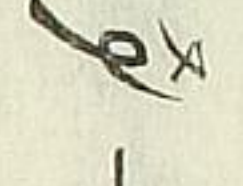
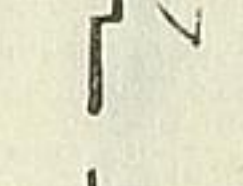

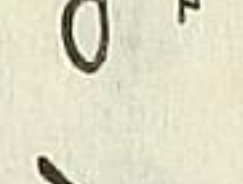

ご如き陋弊をむ斷然去りて、顧みざるやうせまほしきものよこそ。







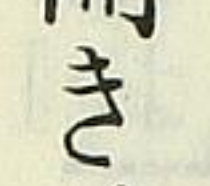
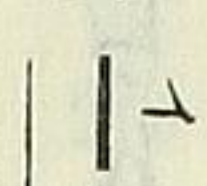
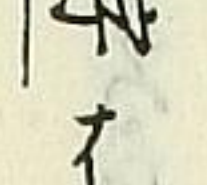
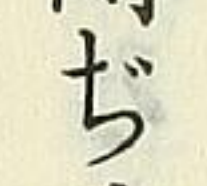
扱此の字體の本因成立、綴字法及書體運筆法どもを序を逐ひて、簡明に指示さんとす。

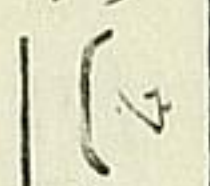
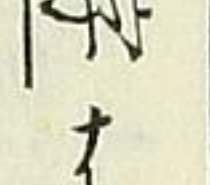
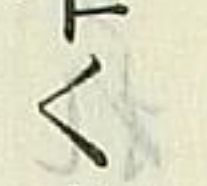
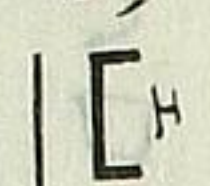
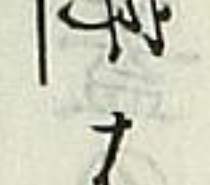
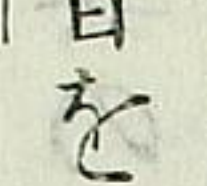
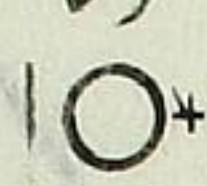
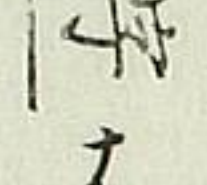
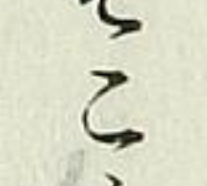
第一章 字體の本因及成立

文字を畢竟聲音の記標に過ぎざる者なれむ、此の速記大日本字も、五十音と相等しく、字數五十の他は出づるものあら事なし。故に音の記標に用ふる字をむ五十音字と名づく。然れども「あ」「い」「う」「え」「お」の五つの母字を除くの外、「か」「き」「く」「け」「こ」「さ」「し」「せ」「そ」「た」「ち」「つ

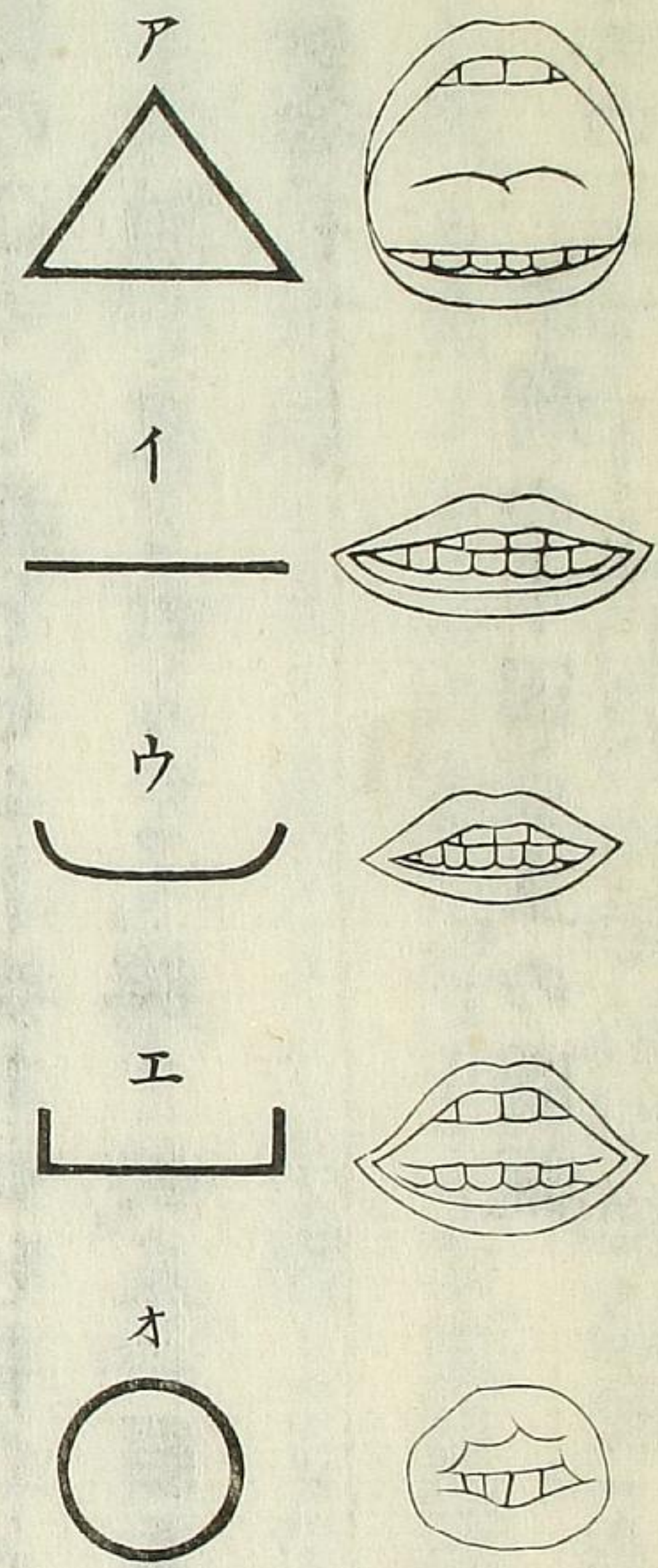
て」と「な」にぬねの「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「ま」「み」「む」「め」「も」「や」「い」「ゆ」「ぶ」「よ」「ら」「り」「る」「れ」「ろ」「わ」「る」「う」「ゑ」をの四十五字を、悉皆「あ」「い」「う」「え」「お」の五つの母字と「く」をつぬふむゆる「じ」の九つの父字との十四字をもて組合せたるなり。今此の條にも、字畫の本原たる父字及母字の成立を先説示さんよ、五十音中、其の母音たる「あ」「い」「う」「え」「お」の五音の記標を、取りも直さず、其の音を發する口の開合の貌を象どりて、字體とすなせらるなり。
即ち「△」「▽」「○」と書くが如し。

又其の父音たる「くむつぬふむゆるが」の九音の記
標も取も直さず其の音を發するよ息氣運營と相須
つ舌唇の作用を表し象どりて字體とむなせらるなり。
即ち「        」と書くが如し。
此の字も子字を生ずる胤と成るべきをもて父字と
稱を。

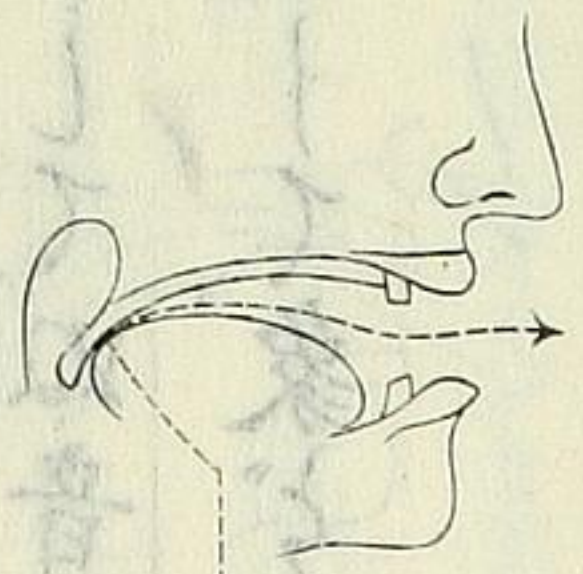
扱其の「   」の「 」を放ち口を大
きく開きけりて「」音を發する貌を象どれるなり。
又其の「 」を放ち口角を側へ拵きて「」音を
發する貌を象どれるなり。

又其の「 」を放ち口を自然形の儘なづら下
唇を窄くする心用ひて「」音を發する貌を象どれ
るなり。
又其の「 」を放ち口角をや、側へ拵き
て「」音を發する貌を象どれるなり。
又其の「 」を放ち口を窄くして「」音を
發する貌を象どれるなり。總て尚左の圖に引照らし
て會得をべし。

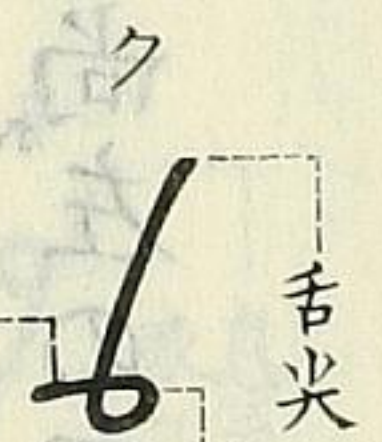
字體の本因成立の圖説



扱又其の「イ エ ア イ ウ ア」のイイイイ
 舌基を口蓋の奥に打合をせて、息氣を其の間は弾き
 て、音を發する息氣運營と相須つ舌の作用を表し
 て象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。



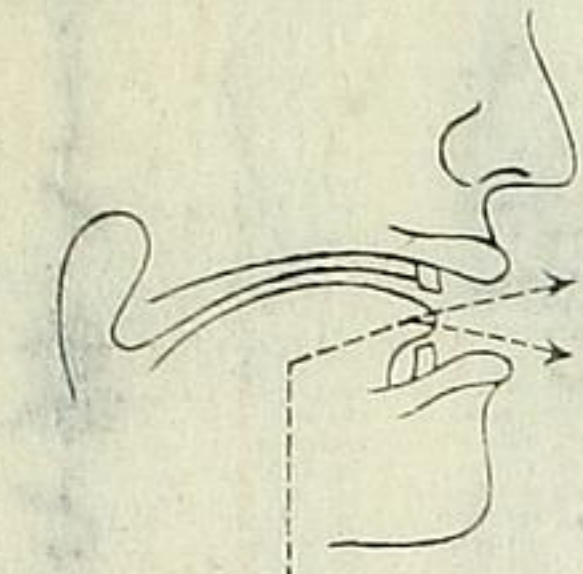
舌基ヲ口蓋ノ
 奥ニ打合ハス



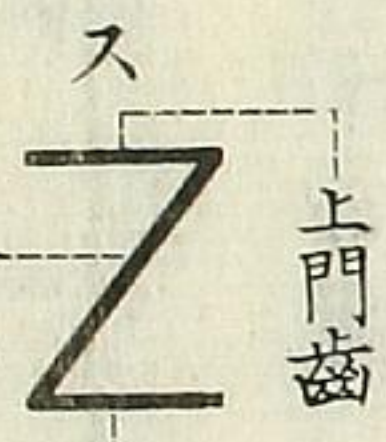
舌尖
 舌基ヲ口蓋ノ奥ニ打合ハセテ
 息氣ヲソノ間ニハジク意味ヲ
 象ドル

口蓋ノ奥

又其の「エ」イイイイ、舌尖もて、息氣を上下の門齒は觸れし
 めて、音を發する息氣運營と相須つ舌及齒の作用
 を表して、象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。



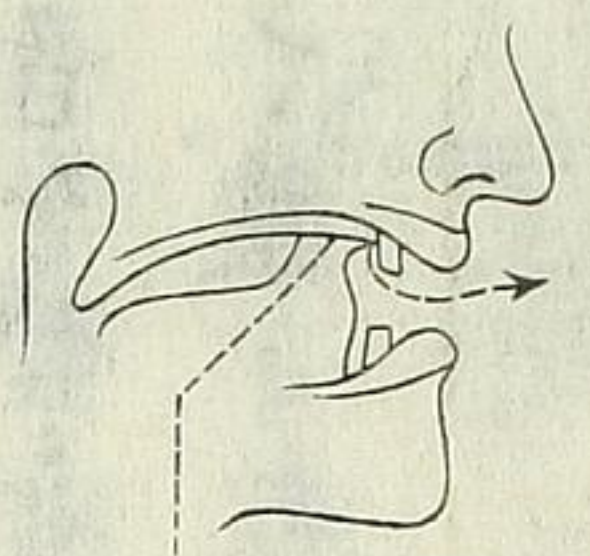
舌尖ヲモテ
 息氣ヲ上下
 ノ門齒ニフレ
 シム



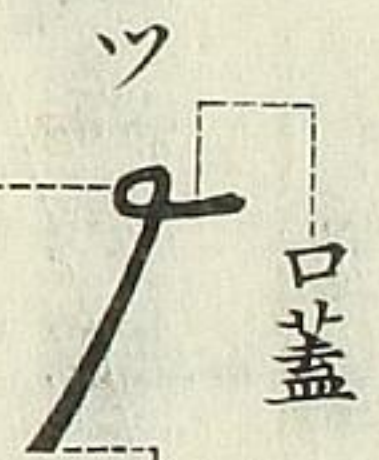
舌尖ヲモテ息氣ヲ上下門齒ニフレシ
 ムル意味ヲ象ドル

又其の「ヤ」イイイイ、舌背を口蓋に打合をせて、息氣を其の

間ニ弾きつ音を發せらる息氣運營と相須つ舌の作用を表して、象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。



舌背ヲ口蓋ニ打合ハス

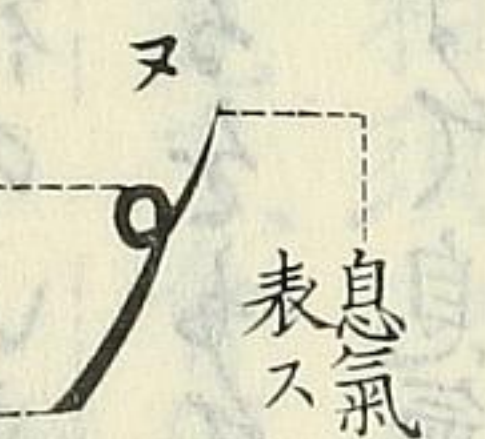


舌背ヲ口蓋ニ打合ハセテ息氣ヲソノ間ニハジク意味ヲ象ドル

又其の如く、舌尖を口蓋ニ打合ハせて、息氣を鼻孔へ洩らして、ぬ音を發せらる息氣運營と相須つ舌の作用を表して、象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。

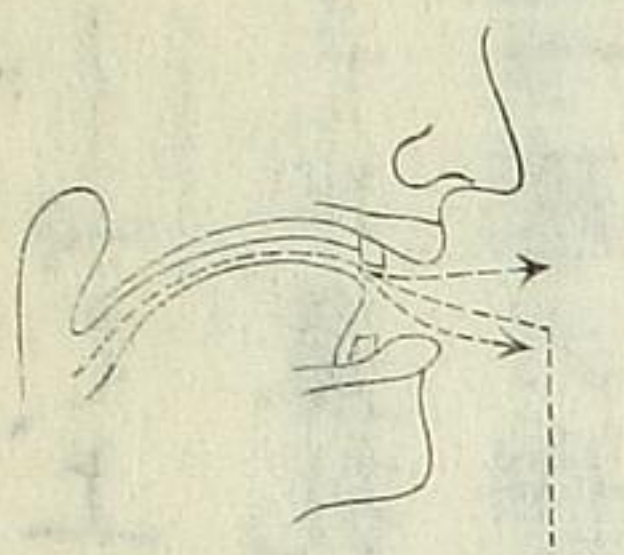


舌尖ヲ口蓋ニ打合ハセテ息氣ヲ鼻孔へ洩ラス

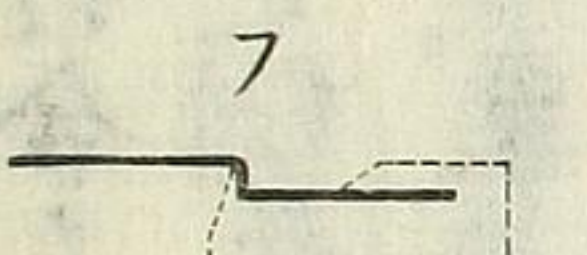


息氣ヲ鼻孔へ洩ラス意味ヲ表ス
舌尖ヲ口蓋ニ打合ハスル意味ヲ象ドル

又其の如く、喉より息氣ヲ直チニ上下兩唇ノ間ニラレム

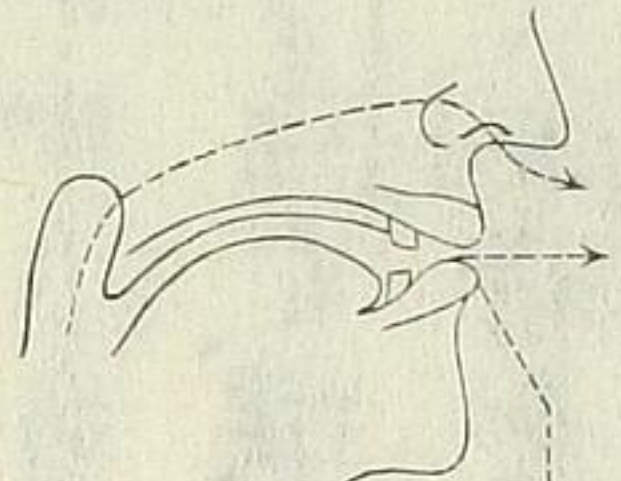


喉ヨリ息氣ヲ直チニ上下兩唇ノ間ニラレム



唇ヲ象ドル
息氣ノ上下兩唇ノ間ニフル、意味ヲ象ドル

又其のハハハ、上下兩唇を打合ハせ、息氣を其の間
 へ彈ハき、半鼻孔へ洩ハらして、む音を發ハする息氣運營
 と相須つ唇の作用を表ハし、象どれるなり。尚左の圖
 を見て、會得ハをべし。



上下兩唇ヲ打合
 セテ息氣ヲソノ間
 ニハジク

唇ヲ象ドル
 息氣ヲ上下兩唇ヲ打合ハスル
 間ニハジク意味ヲ象ドル

又其のハハハ、其の音質、お行のい音とら音とを合ハせ、
 せて、象ハづくりたるものなるをもて、口角を側へ拵ハき
 て、下唇を窄ハくもる心用ひハて、息氣を觸れハめて、乃

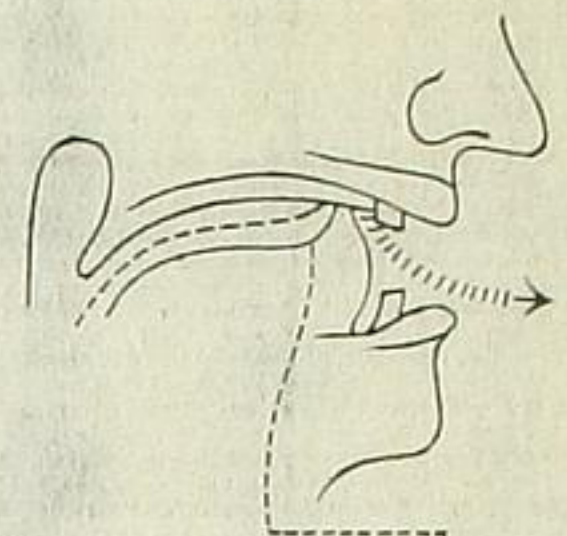
ゆ音を發ハする息氣運營と相須つ口の作用を表ハして、
 象どれるなり。尚左の圖を見て、會得ハをべし。



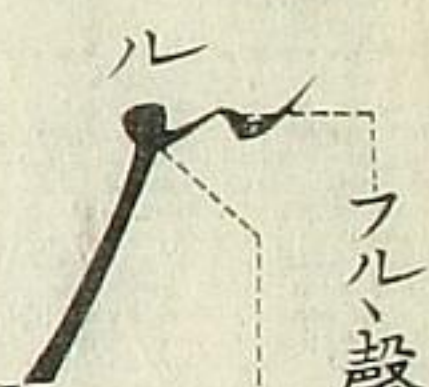
お行ノい音ト
 加音トヲ合セ
 發スミク下唇ヲ
 スポクレテ息氣
 ヲフレシム

お行ノハ字ヲ象ドル
 口角ヲ側ヘヒキ下唇ヲスポクレテ
 お行ノい音ト加音トヲ合ハセテ
 發スル意味ヲ表ス
 お行ノ一字ヲ象ドル

又其のハハハ、舌を卷ハきて、息氣を舌尖ハに觸れハめて、
 る音を發ハする息氣運營と相須つ舌の作用を表ハして、
 象どれるなり。尚左の圖を見て、會得ハをべし。

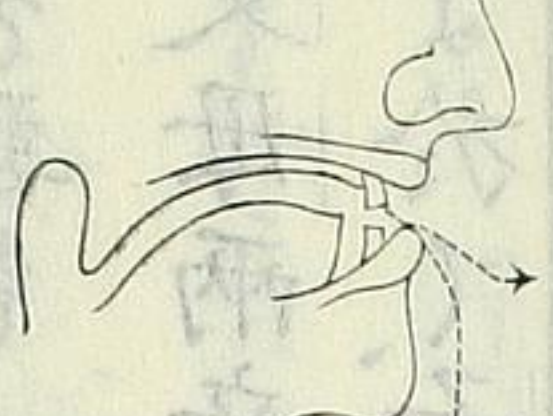


舌ヲマキテ息氣
ヲ舌尖ニラレシム



フル、聲ノヒビキヲ表ス
舌ヲマキテ息氣ヲ舌尖
ニフレシムル意味ヲ象ドル
舌基

又其の^ハハ、其の音質、^ハ行の^ハ音を二つ合をせて、
象^チづくりたるものなるを^ルて、下唇を上門齒^ニ向け、
窄くして、息氣を下唇^ニ受け、乃^チ^ハ音を發する息氣
運營と相須つ下唇の作用を表して、象^ドれるなり。尚^ホ
左の圖を見て、會得を^ズし。



「^ハ行ノ^ハ音ヲニツ
合ハセ下唇ヲ上門齒
ニ向ケスホクシテ息



「^ハ行ノ^ハ字ヲニツカサネ
合セタル意味ヲ象ドル
氣ヲ下唇ニウク

第二章 綴字法及變調符號

此の速記大日本字も、上^ニ説示せる如く五つの母字
の畫と九つの父字の線點との十四字をもて、文字の
本原とを、而^シて之を千言萬語に應用せん^トも、綴字
法をもて、種々の音に配當するものと知る^ズし。但此
の綴字法も、最規律正^シきものより、かの羅馬字の綴
字法の如く一系位中、他の系位の音の字此^レ彼^レ入^リ交^リ

N C N [N O] とやうに父母兩音相偶したる
 が、反切法に因て、約まりたる音なるを以て、其の
 字跡を、必母字の「△」と父字の「○」
 と組合せざるを得ざるを、是自然の妙用として、証ふべからざるの
 理勢なり。自餘皆、左の圖に據り、之に準へて知る
 べし。

速記大日本字





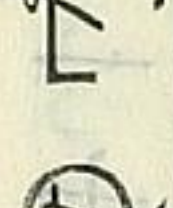


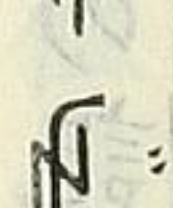
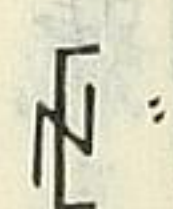
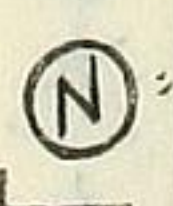

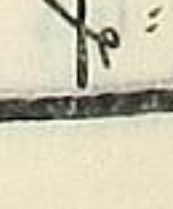
五十音字の圖

△	—	し	し	○
△	ち	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○
△	ぢ	し	し	○

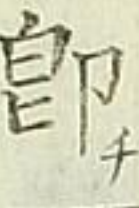

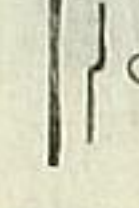
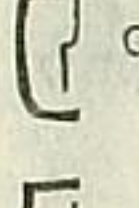
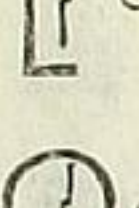
扱我ら大日本帝國の音を、右の五十音字の圖の如く、
 音數五十に定まりてを有れど、種々の變音有り。
 即濁音、次清音、急促音、撥鼻音の四種是なり。
 蓋此の變音たるや、畢竟本音の五十音中、二三の音の

變調は過ぎざるものかれむ、別は字體を要するの理無し。たゞ本音の字體は其の變調の象を表したる點を施してもて、辨別するのみ。此らの點を變調符號と謂ふ。是亦羅馬字よりも、至便至利なるのみならず、本邦の音質は適切なる固より同日の論は非ざるなり。但、此の點の如きも、從來のものをもて襲用せり。

例に濁音が「がぎぐげご」「ざじぞぜぞ」「だぢづでど」「ばびぶべぼ」の二十音を、其の音を二つ疊重ねて震動する如き意味なるをもて、其の象を表して、本音の字首より點を施せり。

即ち「           」と書くが如し。

又次清音が「はひふへほ」の五音を、其の音を唇の間より抑へて、急は放ち、弾く意味なるをもて、其の象を表して、本音の字首より點を施せり。

即ち「    」と書くが如し。

又急促音が「つ」の一音を、其の音を舌背と口蓋との間より抑へ、急は壓縮して、弾く意味なるをもて、其の象を表して、つ父音の原字の首より點を施せり。

即ち「」と書くが如し。

又撥鼻音「ん」の一音を、ぬ音を鼻孔へ撥ぬる意味なるをもて、其の象を表して、ぬ父音の原字の首を撥ねたり。

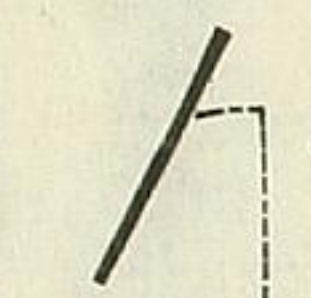
即「ん」と書くが如し。

第三章 數字の成立及用法

數字も物を算ふるは、「一ニ三四」とやうに指を屈伸をらる代用をべき記號は過ぎざるものなれを、其の左手の指を折、屈むる順序は基き先、拇指を屈めたる貌を表し、斜線を引ききてもて、數一つの記號とを、之を萬數の本原と定め、一十百千萬の記號は汎く用ひ

なせり。但十以上を、〇を加へて、數位を辨せり。又線を斜に書きなせらるる、たゞ運筆の序のみならず、左手の拇指を屈めたる貌を表し象とれるなり。

即「〇」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



左手ノ拇指ヲ
屈メタルカタチ
ヲ象ドル

次に示指を拇指の外側は屈加へたる貌を表し、斜線の左は小線を一つ加へて、數二つの記號とを、即「〇」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



中指
示指ヲ拇指ノ外側ニ
屈メクハヘタルカタチヲ
象ドル

次ニ中指を尚^ホ拇指の外側ニ屈^ム加へたる貌を表し、斜
線の左ニ小線を更ニ一つ加へて、數三つの記號とを
即^チ「ミ」と書くが如し。尚^ホ左の圖を見て、會得をばし。

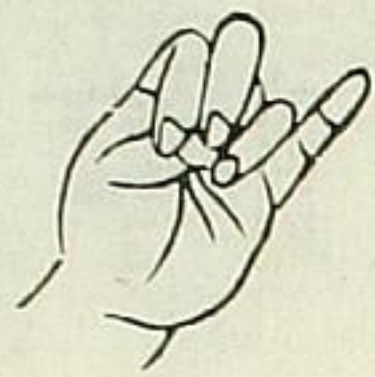


中指
中指ヲ更ニ拇指ノ外
側ニ屈メクハヘタルカタ
チヲ象ドル

次ニ拇指を中間ニ挟みて、其の内側ニ尚^ホ環指を屈^ム加

へ、既ニ屈めたりし外側の二指も、混然たる一物ニ歸
したる象を表し、上鉤斜線の右ニ小線を一つ加へて、
數四つの記號とを。

即^チ「メ」と書くが如し。尚^ホ左の圖を見て、會得をばし。

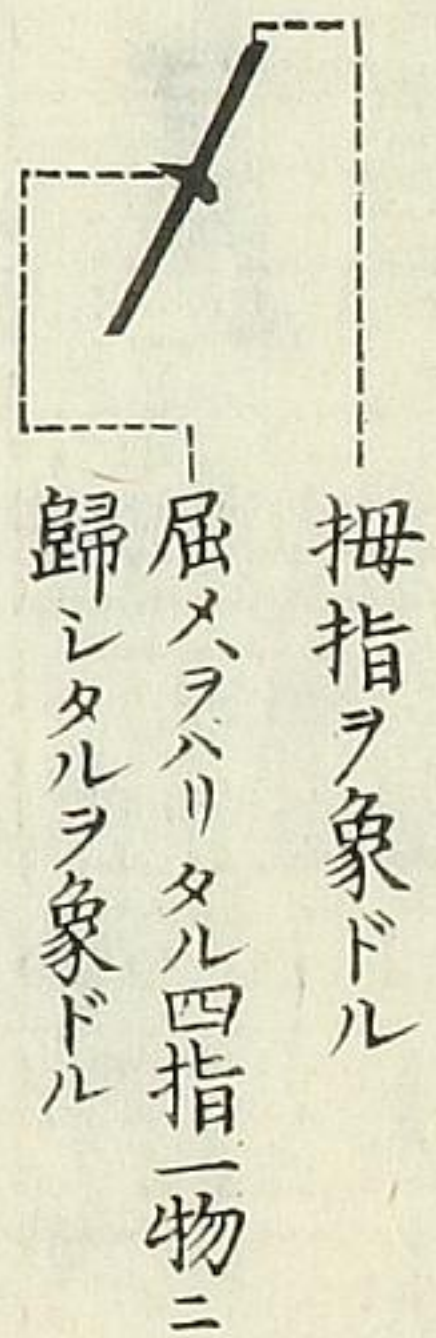


環指
環指ヲ更ニ拇指ノ内
側ニ屈メクハヘタルカタ
チヲ象ドル

次ニ拇指を中間ニ挟み、小指を尚^ホ其の拇指の内側ニ
屈^ム加へ、内外二指づゝ、振分けニ屈^ム竟へたるをもて、拇
指を除く他の四指も、混然たる一物ニ歸したる象

を表し、拇指の斜線の中央に、点一つを加へて、數五の記號とす。

即ち「メ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



拇指ヲ象ドル

屈メテハリタル四指一物ニ
歸シタルヲ象ドル

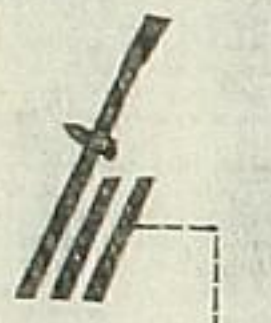
次は小指を拇指の内側に起伸せしむる貌を表し、小線一つを有點斜線の右に加へて、數六つの記號とす。
即ち「ム」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



小指ヲ拇指ノ内側ニ
起コシテハリタルヲ象
ドル

次は環指を更し拇指の内側に起伸せしむる貌を表し、尚小線一つを有點斜線の右に加へて、數七つの記號とす。

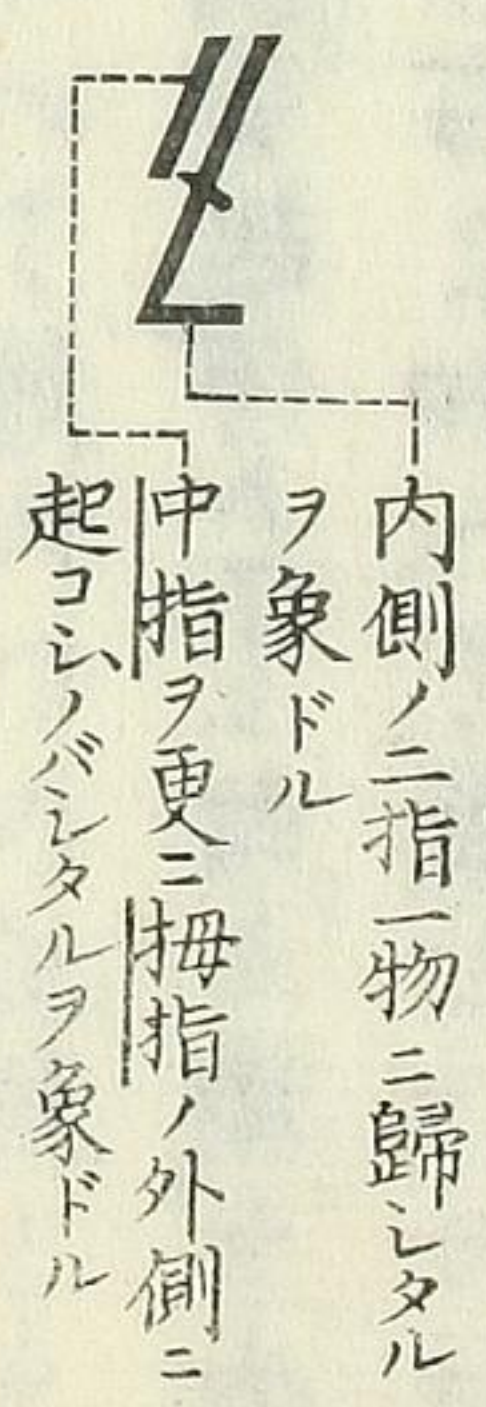
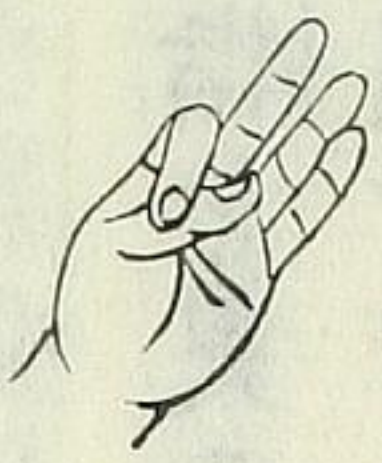
即ち「ミ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



環指ヲ更ニ拇指ノ
内側ニ起コシテハリ
タルヲ象ドル

次は中指を更は拇指の外側は起伸むし、既に内側は起伸むしたりし二指を混然たる一物は歸したる象を表し、小線一つを下鉤有點斜線の左は加へて、數八つの記號とを。

即ち「ㄨ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をばし。



次は示指を更は拇指の外側は起伸むしたる象を表し、尚小線一つを下鉤有點斜線の左は加へて、數九つ

の記號とを。

即ち「ㄣ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をばし。



環指ヲ更ニ拇指ノ外側ニ起コシ、ノバシタルヲ象ドル

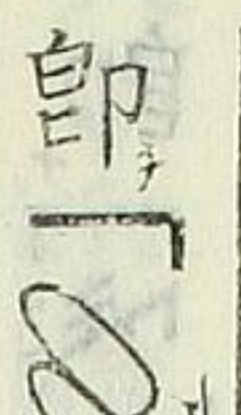
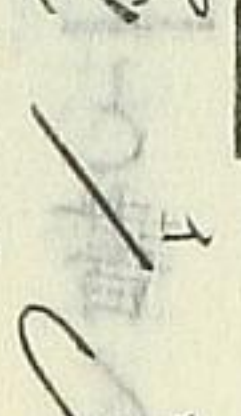
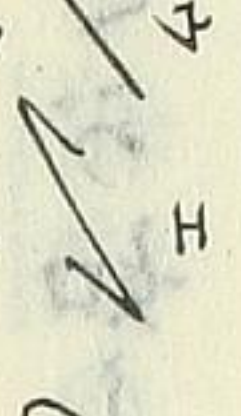
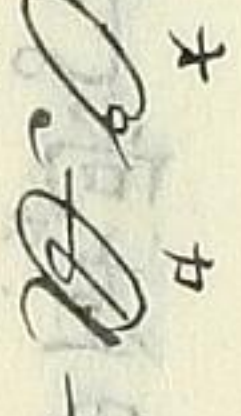
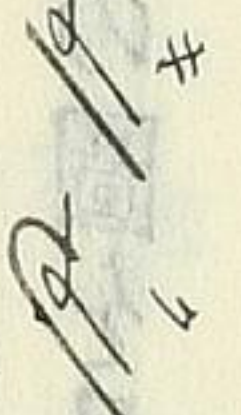
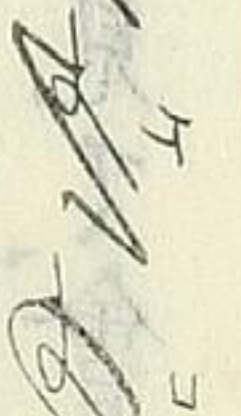
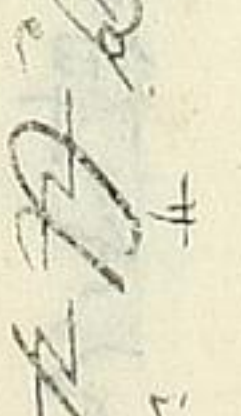

扱此の數字の用法を、即ち横は書きなしく、筆算は應用をさす、西洋の數字は異なる事無し。

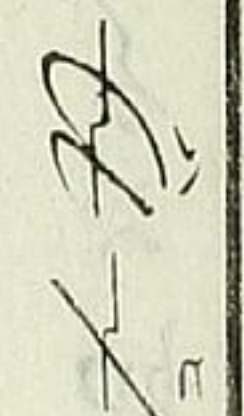
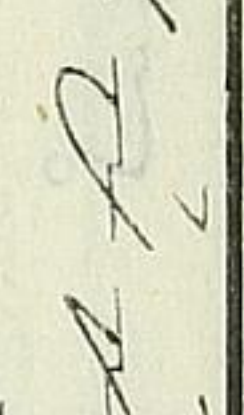
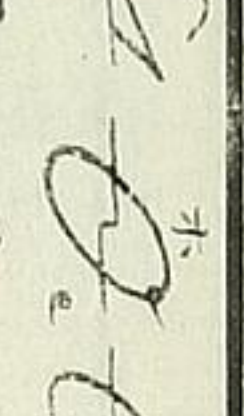
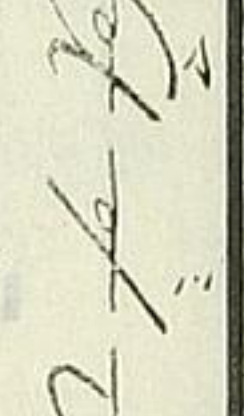
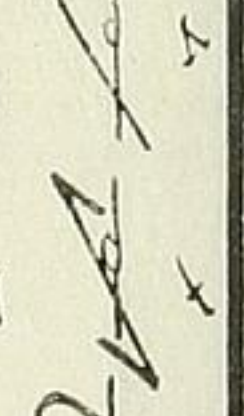
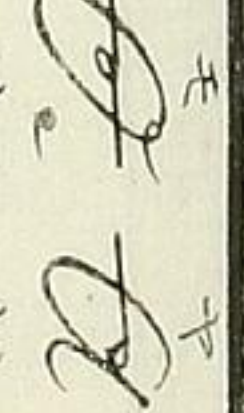
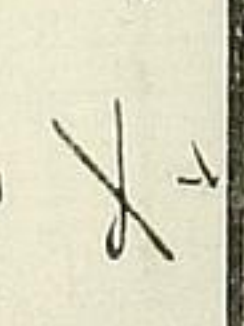

「1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 1000 10000」と書くが如し。

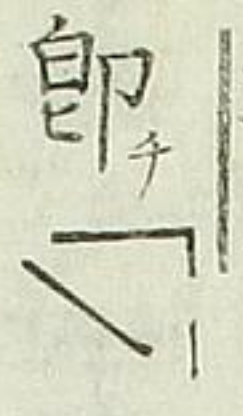
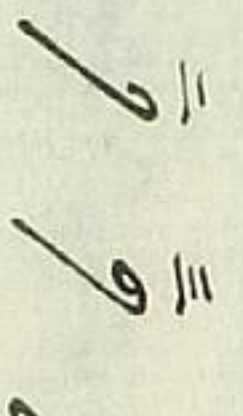
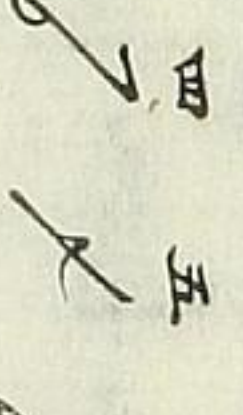
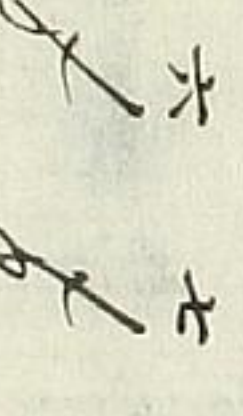
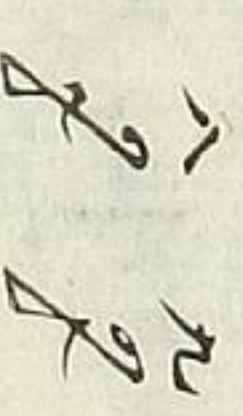
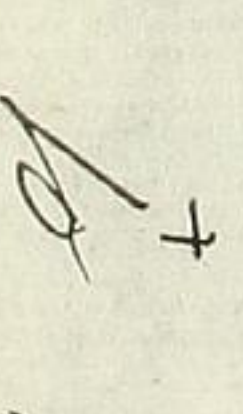
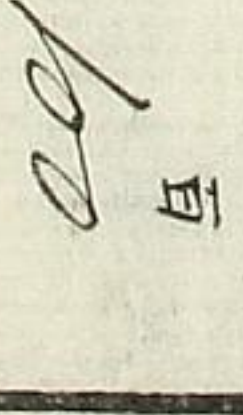
第四章 書躰及運筆法

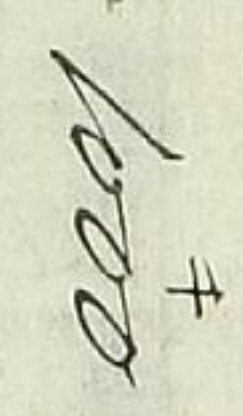
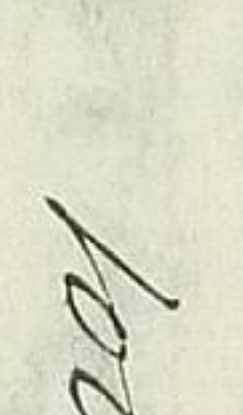
此の速記大日本字五十音字數字共ニ眞書躰草書躰の二様ニ書別かてり。然れども書籍の印刷どもニ物として眞書躰を用ふべしと雖ども此の速記大日本字元來速記をもて所長とせらる處なれど平素筆記の上ニ用ひなむ書躰ニ運筆の速力ニ恣なる續書きの草書躰をもて應用せらるを便利とせむ。

五十音字なるを。

即「 /  /  /  /  /  /  / 

 /  /  /  /  /  /  / 

又數字なるを。
即「 /  /  /  /  /  / 

「」と「」は書くが如し。

運筆法ニ其の語の母字を先續書きよ横ニ書連ね次ニ筆を返して其の父字の線點を其の母字の畫内ニ加へいるをもて法とす。

例を「あづま」と筆記せんは先其の母字を續書き

速記大日本字
速記大日本字

「a a a」と書き、次は其の父字の線點を「a a
e e」とやうに、其の母字の畫内は加へ、いづれが如
し。

又「そみだがし」と書くかおななく先「s s s s s」
と書き、筆を返して「s s s s s」とやうに書き、と
とのへ「s s s s s」と書くは「s s s s s」と
記したるのちよ「s s s s s」とやうに書き、と
のへ「やまこなた」と書くは先「a a a a a」と
書き、あゝと「a a a a a」とやうに書き、との
ふるが如し。

第五章 漢語綴字法

漢語も、本邦語と固より音質を異よせざる有れた、綴字
法、從て異よせざるを得む。

扱此の綴字法を會得せん、も、豫先、拗音標字と尾音
符號とを暗記せむ、有るべからむ。

拗音標字と、謂ゆる漢語の拗音よて、「きゃきょし

やしゅしゅ」「ちゅちゅちゅ」「にゃにょ」「ひゃひょ」「みゃりゃ
りょ」「くっくっ」「ぎゃきょ」「じゃじょ」「ぢゅぢゅ」「び
ゃびょ」「ぐっぐっ」とやうに呼びなむ、如き二十九音
なるら、其の音も、母字の組合せを要せむ、父音の

○速記大日本字
○世一 速記大日本字

字も原字の儘を用ひて、母字の組合せを要せざる
こと上の例と同じ。

例だ

才禮性功業獵論權益敵策
之

職質ハバ説列類記理海内外射裁開被

再興弊習大業會員對面大敵改曆外國

才ガ祭時大詰開設廢絶海氷會社分司

之

利害 謝罪 基礎 地租 交際 容射 創業 講談 皇族

應習 集會 編集 論説 適切 國射 徳望 着目 得失

滑稽 罰則 出立 活發 筆記 達意 疎忽 理屈 一類

説明 脚典 類族 水平 追討 同類

の如し。

の如し。

第六章 指示辭、結尾辭、接續辭及感辭の標

字

指示辭結尾辭接續辭及感辭と共_ニ名詞動詞及形容
 詞副詞接續詞として性質を異_ニせるものなれど標字
 も亦從て異_ニせざるを得ど且_ニ又_ニよる綴字上字
 面相混同して意味の紛擾せんことをふせぐためな
 り。但_ニ母字の組合ませを要せざる事上の例も同じ。

指示辭なるも

イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ

是なり。

結尾辭なるも

イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ
イ	ロ	ハ	ヘ	ニ	ノ	ナ	ニ	ハ	カ	カ	カ	カ	カ



真	ノ	ロ	ハ	汗	ア	エ	ナ	快	レ	ボ	レ	ハ
<i>真</i>	<i>ノ</i>	<i>ロ</i>	<i>ハ</i>	<i>汗</i>	<i>ア</i>	<i>エ</i>	<i>ナ</i>	<i>快</i>	<i>レ</i>	<i>ボ</i>	<i>レ</i>	<i>ハ</i>
キ	ニ	糞	ヲ	ト	カ	ズ	ル	ノ	夜	コ	ハ	糞
<i>キ</i>	<i>ニ</i>	<i>糞</i>	<i>ヲ</i>	<i>ト</i>	<i>カ</i>	<i>ズ</i>	<i>ル</i>	<i>ノ</i>	<i>夜</i>	<i>コ</i>	<i>ハ</i>	<i>糞</i>
キ	ヤ	ギ	ナ	細	コ	ミ	コ	レ	ヒ	キ	ニ	糞
<i>キ</i>	<i>ヤ</i>	<i>ギ</i>	<i>ナ</i>	<i>細</i>	<i>コ</i>	<i>ミ</i>	<i>コ</i>	<i>レ</i>	<i>ヒ</i>	<i>キ</i>	<i>ニ</i>	<i>糞</i>
ハ	ナ	タ	ズ									
<i>ハ</i>	<i>ナ</i>	<i>タ</i>	<i>ズ</i>									

とやうに書くが如し。

第七章 速記大日本字と羅馬字との比較

并は縦書きと横書きとの辨

此の速記大日本字も固より横書き躰の文字なるをもて、運筆の速力、自然の眞理よかなひたれむ、從來の

假名よりも、筆記をるゝ時間を費やさむ、疲勞を覺えざる事、實驗上人の能く知る處たり。文字も、都て縦書きよりも横書きの方、遙か優れるの理由も、筆を持つゝは、拇指の力、多きを要するゝ導かるゝのみならず、を、手臂の運用、左より右へ運ぶも、自然の妙用として、誣ふべからざるの天性とを。尚、又讀む上より、論究せん、人の眼も、横も長く裂けて、視界最縦よりも横も廣く、且、眼球の運用、上下は不便よく、左右は便利なれむ、自然書を讀むは、視力勞れむ、精神も亦從て倦まざるの道理なり。されを横書き躰の文字をもて、世よ

文明の文字と稱せらるゝ、動くまどき説なり。故に漢字及從來の假名の如きも、優勝劣敗なる世の進化に打任かせて、措きて問わざ。今歐米諸國は勢力を恣にせしる羅馬字と、此の速記大日本字との綴字法及字跡の優劣を比較せん爲し、左に五十音圖と二三の綴字例文とを揭示し、公明の鑒識を天下に仰ぶざるを得ざるなり。

速記大日本字と羅馬字との比較圖

オ	o
コ	ko
ソ	so
ト	to
ノ	no
ホ	ho
モ	mo
ヨ	yo
ロ	ro
ワ	wo

羅馬字清音

→	ア a	イ i	ウ u	エ e
	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke
	サ sa	シ shi	ス su	セ se
	タ ta	チ chi	ツ tsu	テ te
	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne
	ハ ha	ヒ hi	フ fu	ヘ he
	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me
	ヤ ya	イ i	ユ yu	エ ye
	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re
	ワ wa	ヰ wi	ヱ we	エ e

○速記大日本字

オ	o
コ	ko
ソ	so
ト	to
ノ	no
ホ	ho
モ	mo
ヨ	yo
ロ	ro
ワ	wo

○廿七 東記大日本字

速記大日本字舎痛片

○速記大日本字

音次濁					→		羅字濁	
速	大	本	濁	音				
記	日	字	音	清				
ガ	キ	グ	ゲ	ゴ	ガ	キ		
					ga	gi		
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ザ	ジ		
					za	ji		
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ダ	ヂ		
					da	ji		
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	バ	ビ		
					ba	bi		
パ	ピ	プ	ペ	ポ	パ	ピ		
					pa	pi		

○廿八 東巴大日本字

音清			→				速大本清				
次	音		記	日	字	音					
グ	ゲ	ゴ	ア	イ	ウ	エ					
gu	ge	go	a	i	u	e					
ズ	ゼ	ゾ	カ	キ	ク	ケ					
zu	ze	zo									
ヅ	デ	ド	サ	シ	ス	セ					
zu	de	do									
ブ	ベ	ボ	タ	チ	ツ	テ					
bu	be	bo									
プ	ペ	ポ	ナ	ニ	ヌ	ネ					
pu	pe	po									
			ハ	ヒ	フ	ヘ					
			マ	ミ	ム	メ					
			ヤ	イ	ユ	エ					
			ラ	リ	ル	レ					
			ワ	ヰ	ヱ	ヰ					

速記大日本字

音及拗本大速
例長音字日記

ギョ ggo	グワ gwa	グエ gwe	キヤ kya	キユ kyu	キョ kyo	クワ kwa	クエ kwe
ジョ jo			シヤ sha	シユ shu	ショ sho		
ヂョ jo			チャ cha	チュ chu	チョ cho		
ビョ byo			ニヤ nya	ニユ nyu	ニョ nyo		
ピョ pyo			ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒョ hyo		
			ミヤ mya	ミユ myu	ミョ myo		
			リヤ rya	リユ ryu	リョ ryo		
			ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
			カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko

じ同又上

羅馬字拗音及長音例

キヤ kya	キユ kyu	キョ kyo	クワ kwa	クエ kwe
シヤ sha	シユ shu	ショ sho		
チャ cha	チュ chu	チョ cho		
ニヤ nya	ニユ nyu	ニョ nyo		
ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒョ hyo		
ミヤ mya	ミユ myu	ミョ myo		
リヤ rya	リユ ryu	リョ ryo		
ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko

と。てをなる同自
畧もるる例餘

○速記大日本字

○廿九 東大日本字

速記大日本字

羅字音濁次音
馬拗の音清

ギヤ gya	ギユ gyu
ジャ ja	ジュ ju
ヂヤ ja	ヂユ ju
ビヤ bya	ビユ byu
ピヤ pya	ピユ pyu

速大本拗の音清
記日字音濁次音

ギヤ ギ	ギユ ギ	ギョ ギ	グワ グ	ゲエ ゲ
ジャ ジ	ジュ ジ	ジョ ジ		
ヂヤ ジ	ヂユ ジ	ヂョ ジ		
ビヤ ビ	ビユ ビ	ビョ ビ		
ピヤ ピ	ピユ ピ	ピョ ピ		

速記大日本字と羅馬字との綴字例文比較

字馬羅

ガクモニヲベン
 キヤカシテミカ
 ナアヤマツコト
 ナカレ
 nakare.
 キヨクヲイヘイミン
 kiyokurai heihin
 ニシテコ、ロガシ
 ni shite kotogyas

字本日大記速

学問ヲ勉強シテ
 ナラアヤマツコトナカレ
 志
 虚懐平心ニシテ
 志
 シテバ高上ニコツ持ツ
 志
 志

ヲ バ カサレ ナ
hi wa ba kashiyu 背

ヲ ニ コリ モツ ビ
umi koto motau be

ケレ
keee.

コハロヲ コサス
Kototo wa komei

セ イ ガイ ニ オキ ナ
seidai ni ohi te

ソノ キボヲ ヒロ
sono kibo wa hiro

ハカレ
背

心ヲ公明正大ニ置

心ヲ公明正大ニ置

キラ 其 規模ヲ ヒロ

道 理ノ 本原ヲ

ソノ 道 理ノ 本原ヲ

クシ ダサリ ノ ホシ
kushi dawari no jom

ゲンヲ サグリ ナ
gen wa saguri te e

ガクモンノ レン
gakumon no shin

ホヲ ハカレ
ho wa hakaru be

レ
shi.

ツネニ クラタイ

ツネニ クラタイ

探リテ 字問ノ 進歩

探リテ 字問ノ 進歩

ハカレベレ

ハカレベレ

常ニ 光陰ヲ 惜シ

常ニ 光陰ヲ 惜シ

<p>シ フ フレミ n no yoshimi te イ タ ヱ フ itayuta ni to キ ヒ フ ス ガ ス whiki no suguru ナ カ レ nakate.</p>	<p>テ 徒 イ 月日 イ タ イ イ タ イ</p>
---	--

第八章 加點畧字躰の綴字法及運筆法の

例文

前章は比較せらる如く、羅馬字と速記大日本字よりも

筆記したる上の字面の冗長なる殆ど一と二との比
例をなして、迂遠なるのみならず、字數を要する上、
至りても、尚^ホ二倍は下らざらべし。されむ、此の速記大
日本字も、運筆の速力も、亦從て共は比準をべきをも
て、時を減じ、勞を省くのみか、紙面を費やさざる事
も、亦其の優劣、天淵月鼈の相違なる、固より言を待た
ざして、明確に知られたり。然りと雖、官省商社な
どよ於て、多端繁忙の間、急劇捷記を要をべき、帳簿
手扣へどもの筆記も、尚^ホ一層速力を倍する簡易至
便の加點畧字躰を用ふべし。其の綴字法は、父字の上

下右端よ、點を施して、母字の組合せよ代表し、子字を綴りなきを志かたし、乃其の點上位なるを、あ母字。下位なるを、お母字。右上なるを、い母字。右下なるを、え母字を表せらる事、前章漢語綴字法の例よ同じ。綴字の字躰左よ揭示せらるが如し。

加點略字躰綴字法五十音字の圖

イ	ウ	エ	オ
—	ㄥ	ㄨ	〇
キ	ク	ケ	コ
ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ
シ	ス	セ	ソ
ㄷ	ㄸ	ㄹ	ㄺ
チ	ツ	テ	ト
ㄷ	ㄸ	ㄹ	ㄺ
ニ	ヌ	ネ	ノ
ㄷ	ㄸ	ㄹ	ㄺ
ヒ	フ	ヘ	ホ
ㄷ	ㄸ	ㄹ	ㄺ
ミ	ム	メ	モ
ㄷ	ㄸ	ㄹ	ㄺ
イ	ユ	エ	ヨ
ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ
リ	ル	レ	ロ
ㄷ	ㄸ	ㄹ	ㄺ
ヰ	ガ	エ	ヲ
e	e	e	e

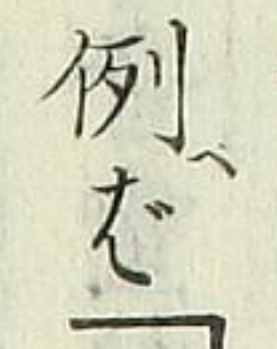
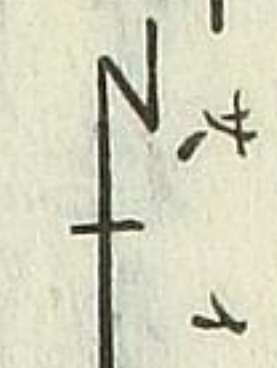
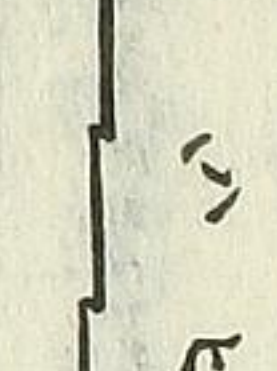
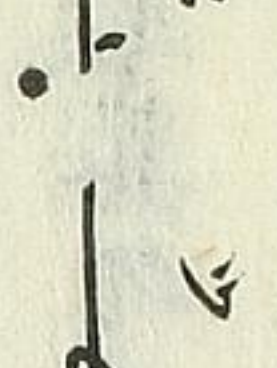
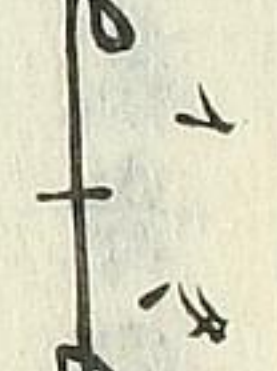
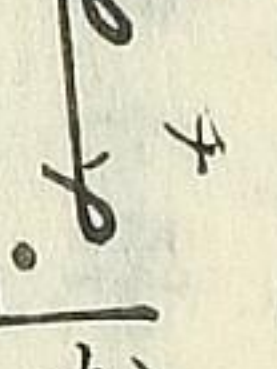
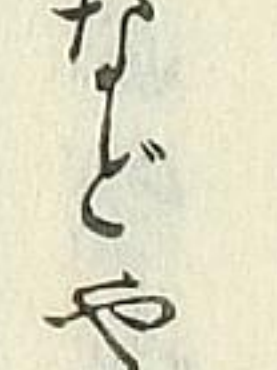
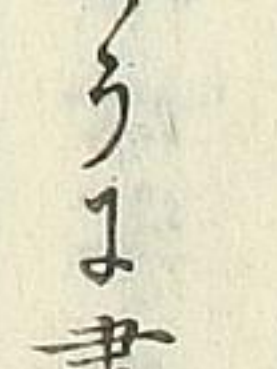
此の綴字の運筆法も、其の言句中母字と父字との原字を先續けがきよ綴りなし、次よ筆を返して、母字の代表點を子字の系位よ應じて、施すを法とす。但、同母音重なれるときも、其の末音の一字よのみ母字の代表點を施して、自餘も畧をべし。且此の點も、數子字の母音を兼ねたるをもて、其の意味を表し、左へ撥ねて、施すべし。又其の始音より母音の代表無點の子字位をるときも、其の界目よ小縦線を施して、其の別を辨むべし。

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ハ
ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㄺ	ㄻ	ㄼ	ㄽ	ㄾ	ㄿ

例だ、


などやうに書くが如し。


且又「ハ」も、綴字上他の字と相混同して、區別し難き場合あり。然るときも、其の界目ヘは同ドク小縦線を施すべし。

例を「ニ」「ハ」「シ」「フ」「ト」「チ」「ヤ」「ウ」などやうに書くが如し。

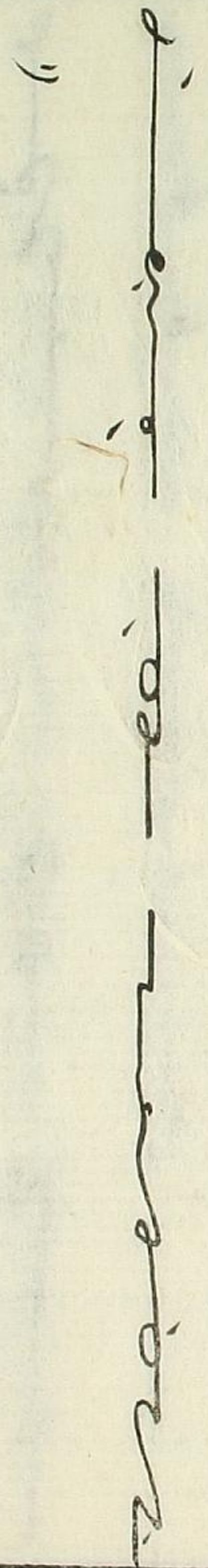
左よ加點畧字躰綴字例文を揭示し、運筆の一斑を窺知らしむ。

加點畧字躰綴字法の運筆例文

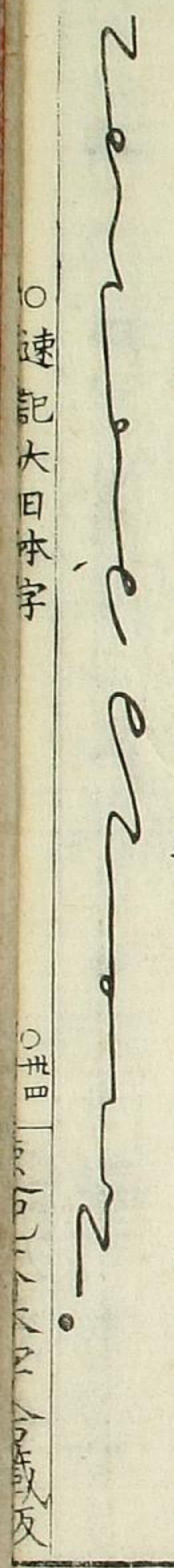
吾 ハ 學 問 ヲ 好



彼 モ 能 ク 勉 強 セ



ナ 陰 ヲ 惜 ム ベシ



月 日 ハ 人 ヲ 待 タ ス

光 陰 ハ 吾 ガ 産 業

ナ リ

國 益 ヲ 計 ル ベシ

優

レ ル ハ 勝 チ 劣

レ

ハ 肩

弱

者

者

肉

ハ

強

者

食

物

。

第九章 略點走筆躰綴字法及運筆例文

前章は揭示せる加點略字躰綴字法を平素の筆記に用ひたると至て簡易輕便なりと雖ども、教場筆記傍聽筆記ともいへる更は尚速力を倍する極速最敏な

る畧點走筆躰を用ふべし。綴字の字躰左に掲示せらるる如し。

略點走筆躰綴字法五十音字の圖

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

扱又此の綴字の運筆法も右の五十音字を基礎として、母字代表點の方位より字尾を聊屈曲せしめて加點

よ代ふる綴り方にて筆を返し其の點を加ふるの手数と注目との勞を省き時を減ぐべきに依り此の綴字法の右より出づるの他より有る事なし。此の字躰を運筆速力の極點とす。此が實地應用をべき法則講習の順序とももの如きも別は著作せらる速記大學生教場筆記法速記大學生教場傍聽筆記法速記大學生教場懇切明確に説示せり。今本書より聊綴字例文の一二を掲示して運筆の端緒を窺知らしむ。

畧點走筆躰綴字例文

忍ニ 耐タ 々々 ハ 諸シ 詰メ ノ 快ク 樂シ

本ホ 本ホ

能ノ ヲ 心ココロ ヲ 勝カチ ヲ

能ノ ヲ 心ココロ ヲ 勝カチ ヲ

前マエ 通ツ 常トキ ノ 事コト 事コト

善ヨキ キ 經マカ 験ケ ト ナ ル

善ヨキ キ 經マカ 験ケ ト ナ ル

艱イ 難ガ 難ガ 辛カ 苦シ ハ 己ミ 己ミ ガ

師シ ナリ

吾ワ ニ

敵テキ スル 者モノ 者モノ

ヲ 輔ホ ヲ 助タ ヲ

成ナ ル ト 成ナ ラ ガル ハ 勤チ ヲ

と310



明治二十年八月九日版權免許
全 年九月 出版

定價金三十錢

著者兼
出版人

發兌元

東京府平民

林 甕 臣

東京神田區西小川町三丁目十番地

速記大日本字會假事務所
右同所

010190528761

10五下

林甕臣
新發明速記大日本字終り。



ル ト 勤 ト マ ガ ル ニ ヨ ル
賢 者 ハ 於 陰 フ 嚮 ヲ
人ト ハ 世ニ 實シ 驗ヲ ナ
キニルニカラズ
~~~~~

43-13809



